

トツプ26尾八木9人決勝17尾松田7人

「オーナーカップ」2025 和歌山・日高川予選

101人が大熱戦

和歌山・日高川で8日、「オーナーカップ」2025が幕を開けた。日高川予選は101人が参加し、2回戦を2時間ずつ、約2尾で腕を競い合い、8月1、2日に岐阜・馬瀬川で開催される決勝大会進出を目指した。

この日の水位はほぼ平水、濁りはなかった。アユの仕上がりは良好で、新アユが付きだした川はますますのコンディション。時折小雨が交じる曇天が続く、水温が上がらない朝イチの追いっかたが、徐々に活性化。ただ、場所ムラがあり「的確に状況を把握した選手が釣果を伸ばし

▲決勝大会進出を決めた(前列左から)森田、梅田、林、後列左から松田、中谷、久保の7選手。下は松田選手



▲徳島予選を突破した(前列左から)八木、林、田中、堤(後列左から)網濱、木谷、城代、河藤、塚本の各選手

第56回報知キス釣り選手権「SESSYA CUP」徳島予選

「第56回報知キス釣り選手権SESSYA CUP」徳島予選が徳島北の脇で7日75人が参加して行われた。午前8時から4時間で釣ったキスの尾数で順位を競い、トツプは八木俊一選手の26尾。林信也・田中義一の両選手が25尾で続き、以下は激戦の末17尾までの8人とレディースの本千春選手の計9人が決勝大会9月21日、鳥取「ク」浜出場権を勝ち取った。これで予選3会場がすべて終わり、決勝進出33選手が出そろった。

た」と松本一平競技委員長がまとめたように、ポイントの見極めや見切りがカギとなった。ブロック、入川順は抽選で決定し、2回戦は2つのブロックから計7人が決勝大会に進出した。決勝大会は、2回戦の成績「オトリ」尾込みは次の通り。※()内は年齢。所属または住所。敬称略。森下周司(61)有田川町。14尾「トロ」で泳がせた。15尾「大石」が点している所を粘り強くやった。馬瀬川

では自分ができることをやるだけ」梅田直廣(51)宝塚市。12尾「オロ」仕掛けで浅瀬を狙った。決勝大会の雰囲気を楽しみたい。林誠二(51)つり吉町。12尾「うん」流れを順着に泳がせて釣った。馬瀬川は初めてになるが力を出し切りた。松田拓也(37)龍水会。17尾目につけていたトロ場で勝負した。決勝大会は少しでも高みを狙いたい。中谷亮介(37)吹田市。13尾「大石」を引いた。泳がせたり、今年はこの大会一本に絞っている。頑張りた。久保智宏(49)迅速会。11尾「水深」ある状態を泳がせた。(前身のオナーカップを含めて)3回目の決勝大会。3度目の正直といきたい。今後は各地で5会場の予選を予定している。▲昨年に開催を予定していた高知・仁淀川予選、静岡・狩野川予選は河川状況悪化のため中止。(大塚 真哉)

▲決勝大会進出を決めた(前列左から)森田、梅田、林、後列左から松田、中谷、久保の7選手。下は松田選手

▲徳島予選の通過者◇

順位	選手名	尾数	所属
1	八木俊一	26	徳島市
2	林信也	25	徳島市
3	田中義一	25	徳島市
4	堤隆一	17	徳島市
5	網濱	17	徳島市
6	木谷	17	徳島市
7	城代	17	徳島市
8	河藤	17	徳島市
9	塚本	17	徳島市

7日早朝、徳島・北の脇海岸には予選を勝ち上がるべく、地元徳島はもとより北は神奈川、南は九州の熊本から昨午を上回る75人の選手が集まった。数週間前には雨の予報も出ていたが、当日は風、波もなく絶好のコンディションとなった。

午前5時半の競技説明後、クラッシュボックス及び餌のチェックを行った。その後、時計合わせが終わると各自、海岸を北へ南へと思いのままポイントに移動し、同6時の競技開始を待って一斉に第1投。これから4時間のドラマが始まる。

今年の徳島予選は、例年より2週間ほど遅れた開催になったことで、それが「吉」と出るか「凶」と出るか、聞くと結構な数が釣れていた。ところが、当日になると、見でのポイントが役に立たない。よく釣れたポイントには魚がおりず、選手たちは餌を繰り返し、キスの居場所を探った。

そんな条件の中で、北寄りのポイントで4〜5色あたりを攻めた八木選手が26尾で1

順位	選手名	尾数	所属
1	八木俊一	26	徳島市
2	林信也	25	徳島市
3	田中義一	25	徳島市
4	堤隆一	17	徳島市
5	網濱	17	徳島市
6	木谷	17	徳島市
7	城代	17	徳島市
8	河藤	17	徳島市
9	塚本	17	徳島市

順位	選手名	尾数	所属
1	八木俊一	26	徳島市
2	林信也	25	徳島市
3	田中義一	25	徳島市
4	堤隆一	17	徳島市
5	網濱	17	徳島市
6	木谷	17	徳島市
7	城代	17	徳島市
8	河藤	17	徳島市
9	塚本	17	徳島市

71歳中村さん 満足の初参戦
3年前に大阪・堺市から実家がある吉野川市に移住した中村紀代子さん(71)。海が近くになったこともあり、釣り好きな夫の正秋さんとの趣味を共有しようと思参加を決めた。投げ釣りは未経験で、正秋さんの指導の下、本番1週間前に投げ方を猛練習。「やっと真つす投げられるようになった」と臨んだ予選では、1尾を釣るに苦労した。次は頑張ろうと賞品獲得を目指しますが、力強く宣言。夫婦仲良く二八三脚で腕を磨き、リベンジを果たす。

4時間目いっぱい、競技を楽しんだ中村紀代子さん

